あとがき

劉　建輝

本報告集は、2007年3月23日～25日、国際日本文化研究センターにおいて行われた国際研究集会「東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的発展のために」で発表された諸報告をもとに編集したものである。研究集会には、日本、中国をはじめ、韓国、台湾、香港などから四十数名の研究者が集まり、基調報告を含めて16名が研究発表を行ったが、諸般の事情により、本報告集には、その内の2名を割愛し、計14本の研究論文を収録した。

本研究集会が開催されるまでに、国際日本文化研究センターにおいて、すでに同じテーマのもとで、3回の共同研究（2003年−06年度「出版と学芸ジャンルの編成と再編成——近世から近現代へ」、2004年度「近代東アジアにおける二字熟語概念の成立に関する総合的研究」、2006年度「近代東アジアにおける知的空間の形成——日中学術概念史の比較的研究」）、3回の国際シンポジウム（2004年2月10日「日中漢語概念の往還」、2005年8月26日−29日「東アジアにおける近代諸概念の成立」、2006年12月16日−18日武漢大学・日文研共催「歴史文化概念の再検討」）を開催し、また本集会後も2回の共同研究（2007年−09年度「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」、2010年−12年度「東アジア近現代における知的交流——概念編成を中心に」）、5回の国際シンポジウム（2007年10月16日−18日北京大学・日文研共催「東アジアにおける近代諸概念の生成と展開」、2008年11月18日−20日「東アジア近代における概念と知の再編成」、2009年11月25日−27日中山大学・日文研共催「近代東アジアにおける鍵概念——民族、国家、民族主義」、2010年9月23日−25日南京大学・日文研共催「東アジアにおける知的体系の再構築——日本と中国の視座」、2012年11月13日−17日「東アジアにおける知的交流——キイ・コンセプトの再検討」）をそれぞれ開催した。その意味では、本研究集会は、ちょうど10年間にわたる「概念」研究の中間報告的な性質を有しており、それまでの研究活動の総括であると同時に、タイトル通り、当テーマの継続的発展を目指したものでもあったのである。

そして、およそこの趣旨を反映すべく、研究集会では、基調講演「東アジア近現代の概念編成史研究の現在」（鈴木貞美）以下、「概念史研究の視点」「概念の生産と再生産」「テクストの諸相」「知識・規範・ジャンル」の四つのセッションを設け、参加者にそれぞれのテーマに沿った研究発表をして頂いたのみならず、多くのコメンテーターに加わって頂き、きわめて盛んに質疑応答が展開されていた。そのこともいささか寄与したのか、ここに収録された論文はいずれも群を抜く力作で、今後の概念研究に欠かせない論考となっている。ただその個々の内容については、編者が今ここで「自画自賛」するよりも、やはり

広く読者諸氏にその評価を委ねることとしよう。

それよりも、編者の一人として、開催から6年も経ち、今ようやく報告書を完成させたことについて、発表者をはじめ、コメンテーターや参加者の諸先生方に謹んでお詫びしたいと思う。この遅延はひとえに私の怠慢以外の何物でもなく、ここにおいて深く反省する次第である。

なお、今回の編集にあたり、発表者との連絡から原稿の収集、整理まで、すべてにおいて日文研の小都晶子特任助教にご尽力頂いた。氏のご助力がなければ、私はけっしてこの長年の「宿題」を完成させることができなかっただろう。これまでの数回にわたる国際研究集会報告書編集のご苦労とあわせて、心よりお礼を申し上げたい。むろん、3日間の会議にご出席頂き、またご多忙にもかかわらず論文をお寄せ頂いた諸先生方、関係者の皆様にも、あらためて深く感謝の意を表したい。